

# 国指定史跡黒浜貝塚 — 太古の歴史舞台へのご案内 —

黒浜貝塚は関東地方を中心とした縄文時代前期中葉「黒浜式土器」の標式遺跡・貝塚として、昭和50年(1975)3月31日に県指定史跡に指定されていました。その後の確認調査により、集落中央部分には北側谷部に向かって開口する東西約50m、南北約40mの凹地(くぼち)状の広場を取り囲むように住居跡37軒、土坑40数基が確認され、この内5軒の住居跡内に貝殻が捨てられた貝塚の他、当時の生活面に捨てられた貝塚5ヶ所も発見され、集落規模は東西150m、南北95m程の範囲に広がることが確認され、平成18年7月28日に「縄文時代前期の集落に伴って形成された貝塚、関東地方を中心に分布する縄文時代前期の黒浜式土器の標式遺跡」、また「南関東の自然環境の変遷や当時の生業を考える上で重要であるとともに、集落の構造は中期以降顕著となる環状集落の萌芽とも見られ、集落の変遷を考える上でも貴重」なものとして『国指定史跡』に指定され、平成25年10月17日に追加指定され、総面積は50,209.22㎡となりました。

黒浜貝塚の中央に広がる『凹地』は、東西約50m、南北約40mの範囲に広がる集落中央の広場の「関東ローム層」を最大80cmも削りとって造られています。黒浜貝塚の縄文人が行った大きな土木工事です。およそ1,600tの土砂が、現在の工事に合すると2tトラック800台分が運び出されたこととなります。縄文時代後期以降の『凹地』の土はこの周囲に環状に盛られますが、『凹地』は北側の谷に向かって開口していることと、谷は「湧水等」集落と一体で生活空間として活用されていたと考えられることから、低地の造成に利用されていたものと推測されます。

遺跡の中の貝塚内からは、普通の遺跡の調査では発見されないような遺物が貝殻によって守られて発見されます。中央写真はイノシシの歯や下顎です。市内ではこの他に、シカ・イルカ等哺乳類5種類、鳥類1種類、甲殻類2種類、魚類12種類、貝類46種類が発見されています。

また、甲殻類(カニ)のガザミ(ノコギリガザミ)のハサミや足先も発見されていますが、現在の関東近辺には生息していません。ガザミの生息域は、汽水域(海水と真水の混じりあう海)のことで、ヤマトシジミなどが生息しやすい環境の泥質帯域で、当時の黒浜貝塚周辺が海水と真水の混じりあう細かい泥が堆積していた環境であることが想像されます。市役所側には「椿山(つばきやま)遺跡」が存在し、縄文時代前期だけでなく、縄文時代中期、後期、古墳時代中期、後期、平安時代の集落や古墳跡が残されています。特に縄文時代前期では、合計住居跡12軒、土坑数基等や硬砂層露頭部も確認されていますが、同時期の遺跡が谷を挟んで形成されているにもかかわらず、椿山遺跡内では貝塚を伴わず、黒浜貝塚では貝層が形成されるという興味深い結果が確認されています。

黒浜貝塚は「黒浜式土器」の名前が付いた遺跡として重要であるだけでなく、当時の自然環境の変遷や生業を考える上で重要であると共に、意図的な凹地(広場)の造成などの集落の構造は、集落の変遷を考える上でも貴重であり、生活基盤の一つである貝採集のための硬砂層の利用等、当時の蓮田市周辺の自然環境を熟知し、調和を図った生活組織構造と人々の具体的な行動様式が垣間見える成果を窺い知ることができます。

「黒浜式土器」は約5,500年前の縄文時代前期中頃に関東地方を中心に広く分布した土器で、「黒浜貝塚」を中心に黒浜地区内の貝塚遺跡群から出土した土器であることから名付けられたものです。このように、土器に名前が使われた遺跡のことを標式遺跡(ひょうしきいせき)と呼びます。市内には約6,000年前の「関山式土器(せきやましきどき)」の名前となった関山貝塚と2つの標式遺跡があり、関山式土器と黒浜式土器は兄弟の関係になります。



ムラのような生活の様子(家作り、土器作りなど)  
(縄文時代の生活と縄文人イメージ Googleより)



上段左から切歯、犬歯、右P2、左P3、右P4、不明前臼歯、下段左頭骨(裏面)?、肋骨?



ムラのような生活の様子(製塩)  
淡路島での製塩作業の様子イラスト(考古幻想HP)より

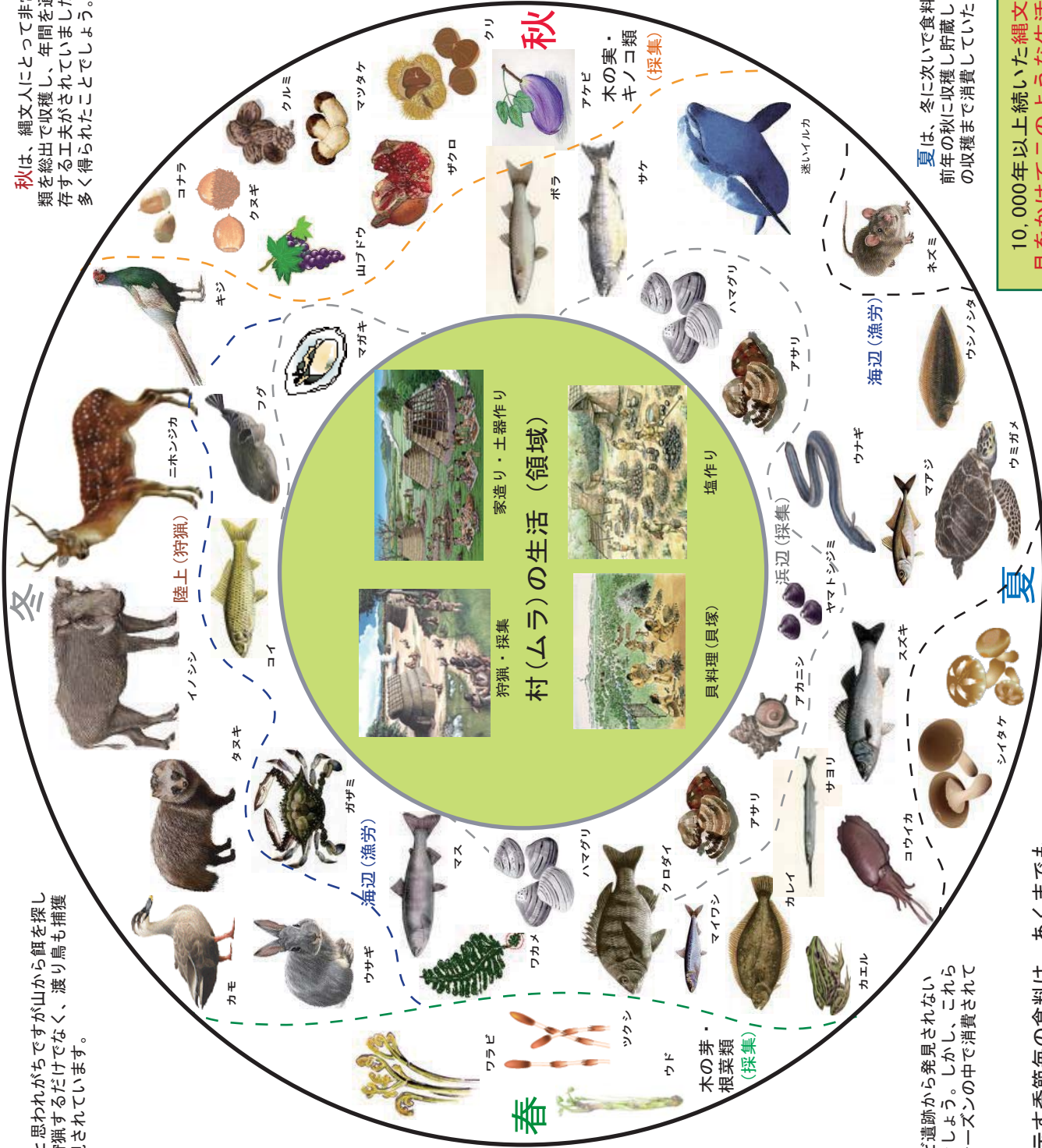


史跡南側の集落(貝塚も存在する)

## 黒浜貝塚全景

冬は、食料が不足する時期と思われがちですが山から餌を探して人里近く下りてくる動物を狩猟するだけでなく、渡り鳥も捕獲していたようで、貝塚から発見されています。

秋は、縄文人にとって非常に重要な季節です。木の実等の堅果類を総出で収穫し、年間を通して食せるように地中深く埋めて保存する工夫がされていました。また、この他にもこの時期の幸が多く得られたことでしょう。



春は、木の芽・根菜類など遺跡から発見されない食物も採集されていたことでしょう。しかし、これらの食物は保存も利かなく、シーズンの中で消費されていたと推測されます。

夏は、冬に次いで食料の確保が困難な時期です。このため、前年の秋に収穫し貯蔵していた木の实類を計画的に使用し、秋の収穫まで消費していたと考えられます。

注：このカレンダ－の示す季節毎の食料は、あくまでも旬の時期を示しています。このため、年間を通して得ることができるネズミ、迷い込んだ時にしか得ることのできないイルカ等も入っています。

10,000年以上続いた縄文時代には、人々は長い年月をかけてこのような生活パターンを築きあげましたが、弥生時代に入り米作りを中心とした生活変化により、人々の生活リズムは戦後まで米作りを中心にした生活リズムへと変化し、現在は更に生活リズムに変化が発生しているのでしょうか。

# 縄文時代の生活カレンダ－